

巻頭言

留学生センター長 五味政信

国立大学法人化をめぐる議論の中で、留学生センターの役割と機能についての検討も同時になされている。留学生センターの柱となる業務が、留学生教育という領域での研究と教育、日本語教育と修学指導、日本人学生の留学派遣関連の仕事であることに当面は変わりないだろうが、最近ではそれらを包み込む、より広範な枠組みとして「大学の国際化」「国際交流」という言葉が浮上している。

これらの言葉をキーワードとしてセンターの将来の姿について考えてみたい。国際化と言う時、留学生センターとしては次のようなことを考える。大学の国際化の議論では時として、在籍する留学生の数が増える、外国人教員・研究員の数が増える、交流協定締結校が増える等、量の面での増加が語られる。だが、それだけで大学が国際化したことにはならないだろう。それは単に国際交流の件数が増加し国際交流が盛んになった、国際色豊かになったということに過ぎない。国際交流の件数など量の増加をもって大学が国際化したと言うのは単純にすぎよう。

身近かつ切実な問題として、受入のための施設の充実の問題がある。留学生のための宿舍を増やす、国際交流会館を増築する等、これは勿論重要である。幸い一橋大は国立キャンパスの国際交流会館（70室）に加えて、小平キャンパスに国際学生宿舍（約650室、一橋大、学芸大、電通大、農工大の共用）の第一期工事分が本年6月に竣工し、宿舍に関しては飛躍的な拡充が図られている。キャンパスでの学習活動や日本人との心豊かな交流が図られるためには、宿舍の整備、それに加えて奨学金制度の充実など、留学生の生活それ自体を支援する手だても勿論のこと、不可欠である。

量の面での改善の一方で、大学の国際化には質の変化も伴わなければならないだろう。その一つはいわゆる「内なる国際化」である。「大学が国際化する」とは「大学自体が日本とは異なる人やものを受容できるように変化する」ということだ。それは即ち、大学を構成する教職員、日本人学生が変わる、我々自身が変わる、ということである。「日本」でなく「世界」というスケールで教育も研究も日常的に考えていること、これを大学構成員があたり前のこととしている状態が好ましい。

「世界」という範囲でものを考えると書いたが、現在の欧米偏重に過ぎる姿勢の転換も質の変化の一つと考えたい。今少しアジアに目を向けても良いのではないか。「なぜこうも欧米にばかり目が向いているのか」という留学生の声を聞く。半世紀も前に「アジアがアジアを知らない」と書いたのは堀田善衛であったが、その状態は今も変わっていないよ

うに見える。大学は欧米に目を向けるだけでなく、もっとアジアに向かうべきだ。アジアの国々、それぞれの地域が現実抱える問題を解決するための共同研究をもっともっと立ち上げてほしい。

その例を一つ挙げよう。本年度、一橋大学は国際共同研究センターを発足させた。その中のプロジェクトの一つ「中国人母語話者に対する社会科学系文献の効率的な読解・作文教育のための基礎的研究」を留学生センターが担当している。現在の留学生数 520 名余のうち、中国語を母語とする留学生は 200 名余を占めている。多数を占める中国語話者に対する日本語教育は、漢字が分かる学習者ということで手薄になる嫌いがあったという反省から出発したテーマで、中国語話者に対する効率的な専門日本語教育を再構築するための研究プロジェクトである。中国の大学から共同研究員をお願いしている。

質の変化そのものではないが、学術交流・学生交流を担当する専従に近い教官スタッフを配置することも考慮されるべきだろう。国際交流の理念・政策立案、そしてまた国際化のための企画・授業実施、国際交流関係データベースの作成、大学内外への情報発信等々といった仕事をセンターに加えて、大学の国際化を一層推進することも考えられて良い。過日、イギリスのA大学の交換留学担当教授と面談したが、氏は 1994 年から責任者を勤めている、大学の学生交流分野の専門家である。外国の大学にはこのような専門家が多く、学術・学生交流における教官の専門性が強く認識されている。センター内に「国際教育交流部門」などを設置し、担当者を配置することによって、大学の国際交流活動を一元的に把握し、専門性・継続性を高める方策が将来的には必要だろう。このことは大学にとってのメリットのみならず、留学生の勉学・生活支援にも必ずや良い結果をもたらすことになる。

以上、大学の国際化を巡って意見を述べてきたが、留学生センターの一橋大学内での位置に関して考えておきたい。21世紀の一橋大学のあり様を展望するコンセプトとして、一橋大学を「新しい社会科学の知の創造空間」とすること、高い資質を備えた研究者の養成や高度専門職業人を養成することなどが取り上げられている。研究と教育の両面で国際交流の一層の推進も視野に入れられている。留学生センターは、上に述べた意味での国際化を推し進めるためには、そしてまた留学生にとっても地域の人々にとっても、より魅力的な空間となるためにはどうすべきかという角度から、大学像を模索する議論に加わることを考えねばならないだろう。その際には、大学の制度全体を見るだけでなく、一人一人の留学生の勉学と生活の充実という面をも注視し、それぞれが自己実現をはかって留学の成果を得られるようにするためにはどうすべきかという視点も忘れないでおきたい。それは一橋で培われてきた留学生教育の原点でもある。

2002年3月をもって、センター兼務教官をお引き受けくださっていた岡野宏次先生(商学研究科講師、留学生専門教育教官)が定年退官され、また水野治久先生(法学研究科講

巻頭言

師、留学生専門教育教官)が転出された。岡野先生は国際交流面での経験と蓄積を存分に発揮して下さり、また水野先生は心理カウンセラーとして留学生指導の面で多大なお力添えをいただいた。心からの感謝を申し上げたい。そして4月より中本進一先生が水野先生の後任として、6月より太田浩先生が岡野先生の後任としてそれぞれ着任され、センターの兼務教官をお引き受けくださっている。先生方のご協力に心より感謝申し上げます。

付記 留学生センター非常勤講師(日本語教育担当)の清水佳子先生には2001年9月1日逝去されました。33才という若さでの夭逝に私たちは言葉を失いました。病を得て後も先生は一層精力的に、そして明るく留学生への指導を続けられました。教室を出ても、魅力的な先生はいつも多くの留学生に囲まれていました。先生を失い、断腸の思いですが、しかし先生は教員と留学生たちの心にずっと生きています。清水先生、安らかに。

2002年6月

